史學童觀抄

三篇

下

リ伊5
4051
6-6

特 伊5 リ門
號 4051
卷 6-6

羽士千里移文
龍王一夕退軍
能羅好逑媚嫉
於焉存心
皇室　松苗

藤田書樓

史學童觀抄卷六

新田氏

源義家ヨ出義家の第三子ヲ義國トいふ從五位下ヨ叙し式部大輔ヨ任ぜ嘗テ入朝す途ヨ右大臣藤原實能ヨ遇ふ實能の從者叱しテ之ヲ辟しむ馬より墜義國の隷士怒テ實能の宅ヲ焚義國坐せられ上野ヨ謫せらる義重義康の二子ヲ生義重新田郡ヲ食す沼兼中平氏政ヲ失し源氏競起る義重兵ヲ集て寺尾の城ヨ據源頼朝鎌倉ヨ起り之ヲ招くヨ答へず頼朝関東ヲ定るヨ及テ義康子の義兼等ヨ並ヨ往き皈ヲ頼朝義重の女ヲ娶テ妾ヲ為んヲ欲ス又肯んせず遂ヨ與ヨ隙あり

義重絶ふ父の爵を襲大炊助に任す七子あり其第二義包嗣と為義包義房を生義房政氏を生政氏基氏を生基氏朝氏を生凡六世皆邑を新田に襲ひ遂に以氏とす旗は白を用ひ中黒を號とす脇屋里見大館堀口鳥山羽川山名桃井一井金谷細谷江田大井田徳川世良田の諸族皆新田氏より出分て上野越後に居る而して皆北條氏に役属す北條高時の後醍醐天皇を隠岐に遷す楠氏兵を金剛山に起す高時関東の將士を遣て之を攻朝氏子あり義貞と云ふ亦遣中に加り已にして城固して拔ず東兵多く逃亡す義貞其家宰舟田義昌に語て曰源平相制し並に王家を護す古より然りと為吾無似と

雖忝源氏の胄裔に列る特時勢を以北條氏の為に驅使せらる官軍に敵す豈本意なんや吾高時の近狀を視るに亡滅遠きに非吾我國に故り義兵を擧上は以宸憂を除き下は以て家聲を興さんと欲す而ども命を受る所あるに非ざれば不可なり安ぞ大塔の宮の令旨を得ば吾事必成んと宮は帝の第二子護良なり二品に叙し兵部卿に任じ山門の座主に充尊雲と號し大塔に居る因て大塔の宮と稱す初北條氏の権を專にすると疾く帝と密に之を討滅せんを欲謀泄東兵来て帝を執護良先之を謀ひ知り帝を奉て笠置山に逃し免自弟宗良と兵を將て邀へ擊て賊を破る已して兵潰え宗良と路を分て

走り南都の般若寺に匿る笠置既に陷り宗良橋に就賊兵を遣て寺を圍む護良経函中に潛て免れ遂に從士九人と道士裝を為し南走して十津川に至り土豪戸野兵衛に依髮を蓄族女を娶りぬ賊之を聞其頭を千金に購ふ護良逃て吉野山に入明年五月兵を吉野に起し寺に據て城を為り又從士赤松則祐を遣り其父則村を諭し兵を播磨に起す已にして賊將二階堂貞藤等大兵来り攻護良親ら戰へども支へ城遂に陷る從士村上義光偽て護良と称して死す護良遂に高野山谷の間に匿る山寇を指使して楠氏を助け又賊の糧餉を奪ふ義貞頗其蹤跡を知れども未だ所在を詳かにせざるなり故に

義昌に謀る義昌乃三十人を山寇の狀に為し自ら卒となり之と山下に鬬ふ山上の寇之を見て下り援く義昌之を生得して其一人を縱て意を護良に通ず護良大に喜び即今を為て之に與ふ權に詔辞を用義貞感喜意外に出て習目病と称して東帰し子義顕弟脇屋義助等と高時を討んと謀る高時未之を覺ず金剛山久しく拔ざるを以て益兵食を徵発す新田素豪戶多きに因り六十萬錢を課し限五日を以て吏卒を縱つて催迫す義貞曰奴輩亡狀敢て我地を蹈藉するあり其吏を捕へ里門に梟首す高時聞て大に怒令を下して新田氏を擊新田氏會議す或は利根川に拒んとし或は越後に赴き其宗族に依ん

とゝ義助進んで言て曰二の者皆計を非なり坐ら強敵を待情見まを形屈し我兵内潰して敗地を塗まゞ人を新田氏使者を戒ふて誅せゝまゝと曰はまゝ死ゝ一たり寧王事ふ死せん匹馬單兵と雖國中ふ徇て衆附ゞ進んで鎌倉を攻ん不まゞ則戰死せん坐ら誅殺を取ふ孰ぞやと衆以て然しまを乃兵を起まを大館宗氏堀口貞滿岩松経家里見義氏江田行義等百五十騎義貞を推て將とし旗を生品祠前ふ竪て義を舉實ふ元弘三年五月八日なり義貞進で笠懸野ふ陣を日暮の比利根河側ふ塵起り兵二千騎ばかりの至るあり衆敵の来るを謂ふ近は則越後宗族の来り援るなり義貞驚喜して曰諸君何を以て吾義を舉るを知て来ゝるの速なる大井田経隆鞍ふ伏對て曰今且羽黒の俊賢来て國中ふ徇ふ是を以て馳至る遠境の者い明日至ゞと俊賢い経隆の弟善走る者なり明日越後の全兵及甲信乃諸源五千騎を以て至る乃兵と合して進で武藏ふ入近國の將士期せずして會する者一日ふ二萬人入間河北ふ軍す高時之を聞兵十一萬を発して族貞國貞將を以て之ふ將とし前後来り擊河南ふ抵て新田氏の軍甚盛なりを望見て敢て進ず我軍已ふ流を乱して至り大ふ武藏野ふ戰ふ両軍皆東國の驍兵素騎戰ふ習ふ地亦平曠射戰罷で相馳突して凡三十餘合乃交ふ退く旦日又久米河ふ戰ふ毎戰鎌倉の兵死傷輙倍す

高時弟泰家をして生兵数萬を以て来り援けしむ夜其軍ゐ
抵る義貞察せず晨を侵して文戰ふ利あらずして退く泰家
乃新田氏を軽んじ曰敵中必らず義貞を斬致す者あらんと皆
甲を釋酒を飲相摸人三浦義勝兵六千を率て来て我軍に属
す義貞礼して計を詢ふ義勝曰方今天下分崩勝敗互に変す
而して大命の帰する所終に在り公幸に僕が兵を并せ以て
一戰まへ義貞曰疲兵を以て新勝の衆に當るを若何曰戰勝
て将驕卒懈者い敗ると泰家の謂なり敗兆已に備へる畏るゐ
足さるのみ詰朝の事僕請公の先を為さんと旦旗を卷徐に進
敵相指語して曰嚮に三浦氏徴に應じて至ると聞是なりと俄

ゐして義貞等翼げて進み三面掩撃す泰家の軍大に敗れ貞
将の一軍小山千葉氏と鶴水に戰ふて亦大に敗れ皆走て鎌倉
ゐ入八州の豪傑響應して爭て義貞に帰す義貞進て関戸ゐ
至る兵凡十二萬騎分て三軍と為て三道より鎌倉を攻大館宗氏
江田行義極樂寺より堀口貞満大島守之兒囊坂より義貞
義助自ら諸將を率て假粧坂より火を五十餘所に縱て進む鎌
倉震駭す而て北條氏見兵猶十餘萬分て三道を拒ぐ義貞貞
満進て山内に入る而て宗氏戰死して其兵皆卻く義貞選兵二萬
を以て夜に乘じて赴く敵大兵海岸に據て柵を樹て兵艦を其
南に列て以て傍射に備ふ義貞馬より下冑を免海に向て拜し

て曰天子逆臣を遷さん西海を越在しあの臣義貞坐視するを忍ぶ兵を提て賊を討伏て願い〻ら海神臣が忠義を眷潮を退け以て道を開わ事へと因て佩る所の金装刀を釋て之を海中に投ず曉る比潮大に退く兵艦皆漂去す義貞大に喜び衆を麾て進む諸軍之に從ひ直に府中に入り風に乗て火を縱て廬戰を高時舉族遂に誅に伏す兵を舉てより此に至る蓋十五日義貞因て鎌倉に居り餘黨を誅し新附を撫し威関東に振ふ是より先天子伯者に在り京師の平らぐを聞将に闕に還りなんとす或諫て曰京師平ぐと雖金剛山の攻兵猶畿内に滿今天下十の一二を得の〻宜く暫く此に居以て東國の変を視るべしと諸公卿皆之を然りとす帝聽ぎ〻て発し兵庫に至て義貞の徒書を得上下大に喜ぶ詔し義貞を左馬助に義助を兵庫助と為使者に爵を賜ふ建武元年義貞従四位上に叙し左兵衛督に任じ播磨守を兼上野の守護を領す義助兵部少輔に任じ武者所の頭人に充

武者所頭人　白河院の御時より初て置る諸國より武士を集て宮中警固の為に詰させらるゝ之此處に候する侍を武者と云遠藤武者近藤武者抔云へり故義助を兵部少輔に任じ仮に武者所の頭人に充き為なるべし

駿河の守護を領す義顕越後守護を領し並に京師に宿衛す

足利尊氏い義兼の遠孫にして地望素著る佐て京師を攻首寵爵を蒙官禄皆遠く新田氏の上に出遂に陰に異圖を蓄ふ而て義貞及皇子護良を忌初帝の闕に還る護良志貴山に居

近畿の兵事あるを以て敢て將に率ゐ入朝せんとして果さず
帝參議藤原清忠をして就言せしめて曰天下既に定る汝將に
何為とか盍ぞ髮を削ぎ復さざるを護良對て曰高時誅に
伏せしめ雖餘黨未だ殲ぼし宜しく武備を嚴にして以て親を絶
ぶ一旦陛下の德微臣の謀以て今日有を致せ而て足利尊氏攘
で已の功とす彼の其志を觀るに測るべからざる者あり其力乃
微なるに及ぶを除ぞんぬ後一高時を生せん臣聞佛に二道
あり攝受と折伏と攝受[攝受とは苦修練行して其心を修攝し柔和忍辱の貌を作し慈悲を先とするなり]折伏とは猛勢忿怒の形を現し刑罰を宗とし縱令逆緣の者たりとも佛法の實義を得せしむるなり願くは
陛下臣に任せらるる我事を以て臣將に陛下の為に折伏を

せんと帝懼めたまふて勉て之に從ひ拜して征夷大將軍とす
而て尊氏を誅せらるを許したまふ護良騶從を具して[騶從　從者數騎]
鹵簿の儼整なるを云ふ入朝す赤松則村先驅たり尊氏深く之を嫉乃帝の
寵姫藤原氏に結び陰に排陷を謀る而て護良察せず輒尊氏
を除んと欲し多く死士を蓄へ密に兵と徵を尊氏其檄を得て變
を上り大將軍反し帝を廢し其子興良を立て帝と為んと欲
と告ぐ藤原氏傍より之を贊す帝怒らせたまひ十月甲を伏て
護良を召し之を執へて宮中に囚す護良憤怨識る所の宮人
因上書して白臣罪累を以て敢て寃枉を訴ふ唯陛下之を憫察
したまへ臣夙に武臣の專恣を憤り法服を釋て戎衣を被て世の

護良親王騎從を
具して入朝し給ふ

忠孝排君父
難折衝威何
侃々彼婦舌
利於刃請室
書有孰信

千葛の
あだ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
春彦

識を受て君父の為に軀を忘る在廷の臣子敢て力を效さ莫し
而て臣獨空拳を張以て強敵に抗す賊の耳目臣が身に集り
臣を購ふ萬戸を以てす臣晝伏夜行山谷に匿き霜雪を踐殆
と死して復生者數思を焦し籌を運し遂に誅夷の績を底
を得圖らさりき罪を此に獲んと仰て將に天に訴んとすれば
日月不孝の子を照さず俯て將に地に哭せんとすれば山川無礼
の臣を載ず父子義絶乾坤共に棄臣敢て復世に望有ざる也
儻死刑を宥せられば籍を削佛に皈し臣終身悔る母なん申
生死て晉國乱扶蘇刑せらるて秦世傾く聖朝盍ぞ古を延て
以て今を鑒みざる涕隕心惛て言人と欲る所を終ぶと書へ

て敢て奏達する者莫し諸護良に從者皆誅せらる赤松則村
亦其守護職を褫はる十月勅して護良を足利直義に附す
之を鎌倉に徙し窖を二階堂谷に穿て之を幽す一宮人南の局
を縱て侍せしむ二年七月北條時行乱を作し鎌倉を襲ふ
直義敗走す走るに臨淵邉義博を召て曰時行患ふるに足
らざる患ふべき者兵部卿なり宜く此時に乘じて除くべしと
義博往て窖中を窺ひ護良方に燭を焚て經を誦て顧み蹶起し
て曰汝我を殺んと欲ると前んで其刀を奪ふ義博其膝を斫
之を踣し胸に跨て吭を刺護良頸を縮め其鋒を嚙鋒折貳刀
を拔て心を刺こと乃絶年二十八義博首を直義に覩んと欲す

其瞋せざして鋒を舎を以て棄去侍女之を收葬し將士皆り狀
を奏せんとを而て帝已に尊氏に命じ東時行を伐尊氏遂に鎌
倉に據自ら將軍と稱し新田氏の邑の關東に在者を奪ひ以て
將士に令ち予へ疏を抗し義貞を罪狀を義貞乃上書して曰く
嚮に天下の大亂に當り乘輿播遷楠正成等豪傑並起り相
共に王に勤す而て足利尊氏首鼠兩端勝敗を觀望し賊軍
利を失ふに非るよりは蓋肯て降らざるなり功微賞多し遂に非
望を冀ひ臣の忠義を害し詭言して陷んと欲す臣五月八日を
以て六波羅を佐攻す而て臣京師の復るを聞て兵を起すと
雖も以て天聽を欺罔す其罪一なり臣五月廿二日を以て諸軍を

率高時を誅す而て彼の兒子從士百餘人を率ゐ六月三日を以
鎌倉に入而て臣其兒子に賴て以功を成といへ其罪二なり彼董
下に在て擅に親王の卒を誅す其罪三なり征夷の任兵部卿
親王にあり而て彼其號を掠其罪四なり矯て管領と稱し
恣に威福を張其罪五なり中興の業天運に因て雖も抑兵部
卿の謀策多く居而て彼百方讒構遂に流謫に抵る其罪六
なり陛下心兵部卿の自艾を期のみ而て彼私仇を修し[illegible]を
牢狴狴狂を胡地の野獸狗に似て善守る故に獄舍に辱しむ其罪七直
義亂に乘し遂に又兵部卿に傳大逆無道其罪八此八罪を
天地容ざる所なり願くは陛下之を照鑒し速に明照を下し

以て尊氏兄弟を誅伐せんと廷議未だ決せざ會護良の侍婢
至り狀を奏せ而て尊氏反迹遂に天下を暴る十一月乃詔を
下し尊氏を討兵六萬を徴し節刀を義貞に授し節刀節
割符ふして所々を通ずべき證なり又國々の至人數を召時ふも之を以て
證とも其征べき国々へ割符を遣しわき總大將節を持行符節を合て用を
辨も国々へ遣しおくを符といふ後世此代りに太刀を以て諸將を總皇子
賜り大將に任せらるゝ證とも之も節刀といふなり
尊良を奉じ海道より進み忠房親王一軍を以山道より進む
義貞常に精強七千を揃で中堅とす而て栗生頭友篠塚伊賀
畑時能亘忠景由良具滋長濱頭寛等の十六騎最驍悍敵
擊を善とす其徽號を同じ進退與に俱にす義貞矢矧河に至
河東皆足利氏の兵義貞頭寛を召津を視せしむ還り報て曰

津三處あり然ども前岸峻絶敵鏃を攢て之を守る敵を誘し
渡らしめんと之を水に蹙まるゝ若ざる也と之に從ふ賊兵を分ち
左右より渡り戰ひ且卻く終に萬騎を縱中より渡り義貞を犯
す義貞中堅を以迫り擊て之を破る賊退て驚坂に陣す又擊
て之を破足利直義二萬騎を以來り援ひ兵を手越河に盛り次
義貞之を望て曰敗卒後にあり必先駆人餘衆支ふる能はる也
と戰て夜に遠ぶ彊騎を遣り間道に循り薄て其後隊を射る
後隊擾走る諸營遂に大に潰走て鎌倉に返る尊氏大に窘し
髮を削て出降らんと欲し未だ果さず義貞附降數萬を引く
伊豆府に至り山道の軍を遲數日賊軍復振凡數十萬人直義

出て箱根に拒ぐ十二月十二日義貞義助をして皇子を奉じ竹下に向はしめて自ら箱根を攻高に登て将士を覽視す将士皆奮戰す直義の兵沮靡し殆ど支ふる能はざる而尊氏十餘萬を以て竹下に出竹下の官軍七千人先進して先走る義助手兵を以て之に代り格鬬して交に退其子義治年甫十三両騎と賊中に陷り號を撤髮を被り賊と偕に退く義助營に還れば義治見えず復進で之を索め直に賊軍を冒て軍潰走義治父の來り救ふを知り伴て賊兵を呼盍ぞ反戰せざると二賊之に從ふ我軍に及ぶ義治從騎に目し其賊を斬て殺り義助に獻ぜ義助大に喜び乃退息ひ塩冶高貞等を遣り更に進む高貞等叛て賊に降り官軍を乱射す義助夜退き義貞に合せんと欲義貞方に直義に克明日を俟て進んとす舟田義昌前軍にありて直義の陣中將軍捷りと傳呼するを聞乃我諸營を巡視するに帷幕儼在して復一人無し走て之を義貞に告ぐ義貞黙然曰是或い降或い逃なるん我少し退て其逃る者を捉て復戰んと乃山を下て西に兵僅に五百人尊氏の兵數十萬伊豆府に充牧を栗生頭友篠塚伊賀輩に據衆を顧て曰一騎當千の諸君の謂なりしと乃衆に先て前賊爭て義貞に薄る伊賀蹴て之を仆し立に九人を斬餘賊敢て薄らず義貞行散兵を收二千人を得天龍河に至り浮橋を造り軍を濟義貞義昌と濟叛者あり潛其組を絶

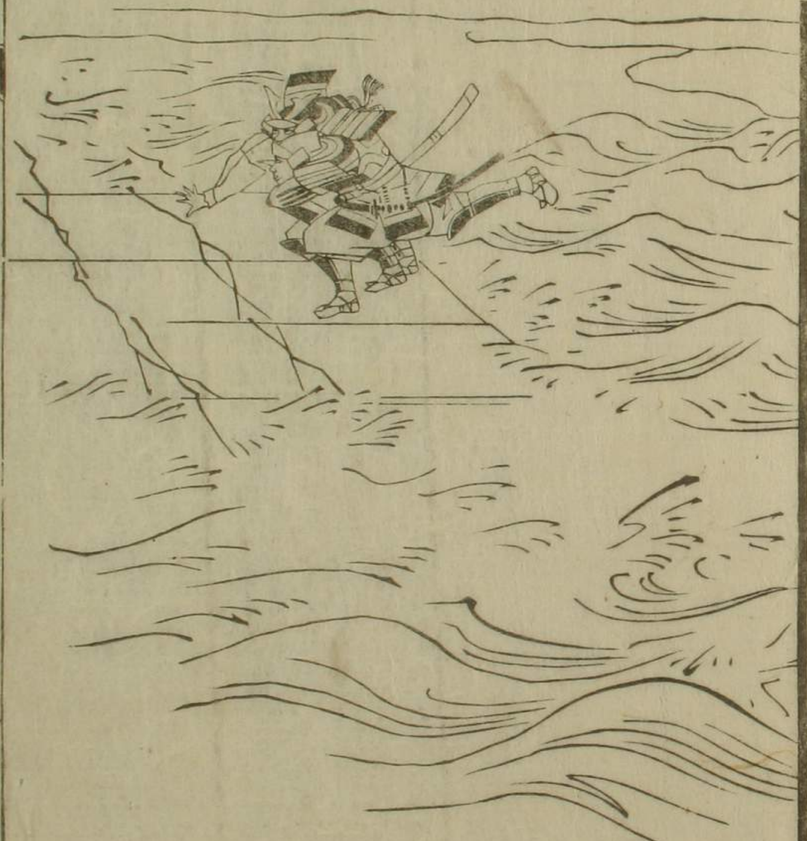
僕馬を牽前こ輙陷る義昌曰誰之を援すこ顯友重鎧水ゝ沒し
両手人馬を提て前岸ゝ達する時ゝ橋陷る丈餘義貞義昌相挈て
跳り既濟る或橋を撤して追兵を沮んと議す義貞曰我且之を爲
る彼寧爲能はすゝんやと橋を存して去り矢勁驛ゝ也も兵多ゝ道
より亡守都宮公綱其退て洲の股ゝ阻んを勸む義貞之ゝ役ふ朝
廷亦近畿皆叛京師を四窺るを以急ゝ義貞を召還すを義貞
乃京師ゝ還り諸將を部署し自ら萬人を以て大渡を守る義助
推中納言藤原公泰僧文觀等と七千人を以て山崎を守る江田
行義五千を以應援ゝ備ふ延元々年正月行義丹波の賊兵を峯
堂ゝ擊て之を走ら次而て尊氏數十萬を將ゐ大渡ゝ至る義貞

豫ゝ橋板を撤し柳を水中ゝ樹兵を伏して岸ゝ呼しあて曰丹後の兵我
已ゝ之を殲せり公盍ぞ來て死を決せざる賊兵怒り筏を造り
渡る柵ゝ遇て止る我軍乱射す賊紛擾し筏壞て溺る者數百人
又橋ゝ呼しめて曰舟筏益母し請此より來れと賊千餘人爭ひ進む
折斷て皆溺る尊氏遂ゝ戰を休て進まず已すて賊兵二萬來て
山崎を攻公泰文觀の隷士爭て賊ゝ降る賊卽入義貞山崎の軍
破れ賊兵闕を指て聞馳て義助を援け將ゝ與ゝ俱ゝ帝を敵
山ゝ奉せんと乃賊將細川定禪兵六萬を將ゐ之ゝ尾す義顯三
千騎を以告ぐして返し射戰を久し義貞の已ゝ闕ゝ至ると度り
則大呼して敵を衝大友氏泰宇都宮公綱新ゝ降て敵中ゝあり

浮梁を跳て義貞天龍河を渡る并衆生顕友怪力の圖

美隆

天龍河の源信州諏訪湖より発し伊奈郡より流れ高遠川と合し遠州小入官道を貫き掛須賀に至て海に入街道三大河の一なり



義顕を識必らず之を獲んと欲義顕奮戰八合大創數十を被り
流血淋漓還て紫宸殿前に至帝親臨して之を勞し遂に義貞
義助と俱に乘輿に扈し敵山に起く細川定禪來て園城寺に據
相持して未だ戰いまず會陸奥守源顕家入援く新田氏の族の東
國に在者相率て之に從ふ大館氏明て宗氏の子なり從て近江に
至り攻て一城を拔遂に來て義貞に會す顕家馬を休て後戰ん
と欲氏明曰我馬遠來休むる足重くして用ふべからず今夜直に
園城寺を襲ひ其不意に出るに若かず義貞之を然とし即夜兵
を唐崎に出し黎明諸將と六萬騎を以園城寺を圍賊門中より
槍を叢て之を拒亘忠景其十六槍を奪ふ畑時能足を擧て門

扇を蹋て之を倒す我軍入て火を縱ち定禪を走て首を斬こと
七千餘級顕家乃退義貞亦兵を收んと欲舟田經政馬を扣說
て曰兵の利勢不乘ざるなり賊兵一敗魄褫き氣沮ん因て之
に攝し勝に乘じて連に進すい其渠魁を獲べきなりと義貞
曰然りと即三萬騎を率ゐて之を追ふ賊返し戰ふを得ず伏尸
狼藉餘衆走て京師に皈り尊氏の軍に合す義貞進んで華
頂山に上り敵軍を望は敵軍京師に充塞して其幾千萬なる
を知ず義貞計に寡を以衆に當る徒戰して勝べからず乃我兵
互に面を相識者を以て五十毎に伍を一旗を卷號を撤敗卒の
狀を為し混じて彼軍に入戰を待て起と乃二千騎を部して之を

遣り已まりて両軍接戦六十餘合我軍毎に勝以て日暮に至り遣る所の二千騎賊軍中に在て旗を揚て並起る賊軍大に驚て擾乱し遂に大に潰奔す我軍勝に乗じて之を追ふ短兵急接尊氏迫蹙し自刎せんと欲さるべきより義貞桂河より還り京師に陣す其兵四散鹵掠を在者亦疲賊軍返し襲ふ支まりて退く舟田義昌等戦て之に死す會山道の兵戰期を失まるもの還り至る諸将又戰んと議し夜山を下て陣し且日楠正成源顯家路を分て進戰ふ尊氏親ら顯家と四條に戰ふ義貞義助旗五十旒を建横に之を擊馳て其背に出賊軍呼て曰中黒至と輙崩る義貞獨り服を変し賊中に入て尊氏を索るに獲ず兵を分て之を追ふ日暮て乃退き軍を坂下に還し尊氏を誘て京師に還らし日を間て襲ひ擊尊氏大に敗を攝津に走る義貞諸将を率ゐ追擊て又大に之を敗る尊氏狼狽海に航す諸軍舟を爭ふて溺るゝ者数千人鎧仗を海濱に委棄す二月乘輿關に還る詔して義貞を左近衛中將に義助を右衛門佐に遷す時に新附の兵萬餘嚮に足利氏の旗號重畫を用ひし者皆其中を墨抹して中黒と為淡濃辨ぜず京師傳へて笑を為已に足利氏西土を保聚して勢復大に振ふ赤松則村石橋和義及菅某等並起て之に應ず三月義貞に詔して山陽山陰十六國を管領して西伐せしむ會疾あるを以て江田行義大館氏明を遣り

二千騎を將ゐて先発す赤松則村の兵は書写山下に遇撃て之を走らし義貞疾愈て五萬騎を將ゐ出て鹿子河に次す並に降附萬人進て斑鳩驛に至り且に則村を白旗城に攻んとす城壁未成て則村降を請ふ義貞喜び為に朝に請ふ朝旨至る比辟成則村乃降らず義貞大に怒て曰吾之を禽して後前行せんと軍を合して之を圍む城險にして下らず義助之を諫め三萬人を分て義助に附し進て石橋和義を攻和義三石に據舟坂に拒ぐ義助兒嶋高徳の郷導を得乃一軍を舟坂に留め一軍枚を銜て馬舌を縛し間道より舟坂の背に出賊顧て驚駭す義助夾撃て舟坂を拔遂に三石城を攻江田行義を殺て菅氏を菩提城に攻し大井田氏経を殺して二千人を以て進て福山城に據り城未だ修せざるを而して尊氏直義九國の兵を率て来城兵之を避んとす欲氏経肯せず五月直義兵数萬を將て之を圍む氏経出撃圍を潰して東走し義助に合す義助使を馳て義貞に告ぐ義貞答て曰敵海陸並び進む陸なる者を扞ぐ則海なる者直に闕を犯さん吾退て兵庫に屯し海陸を合せ捍ぐと乃白旗三石菩提三城の圍皆解義貞先鹿子河に至るに河水方に漲る衆敵の後に逼るを以将帥先濟んを請義貞曰敵来らば水を背にして決戰し吾濟んのみ乃創病の者を先濟らむ明日水減ずして義助行義亦至る遂に濟て兵庫に至るに則其兵亡者

半ば過帝正成をして来り援けしむ義貞迎へて朝議如何と問
曰吾公を召還し駕を敵山に奉せんと欲聽もぎるやうと義貞曰
敗卒を驅て鋭師に當る吾其必敗るを知のみ顧ふに去歳関東
の敗を今復未だ一城を拔ず何を以復命せん吾決死一戰を欲と
正成曰進退宜に從ふ是を良将とす公且徐ろに之を計らぬ且前
高時を殪し後尊氏を攘ふ公の武多し根言何ぞ恤るに足んや
と義貞色釋且日尊氏兵艦海を蔽て至直義須磨より来る
旌旗天に弥る義貞正成をして直義を拒義貞氏明に尊氏を
拒しめ自其後に居り相持して未だ戰を決せず我軍に一騎あり弓を
挾て岸に立呼て曰将軍西来必ず津妓を載て置酒高會あ

らん請一物を進て酒を佐んと箭を注て俟適鶚の魚を攫て擧
るもの乃馳て之を射る其隻翼を断敵舟中に墮て両軍讙呼す
尊氏其名を問しむ答て曰東人或識ん請刺を投せんと復一箭
を発三百歩を軼し船舷を貫く尊氏其箭を視るに笴に刻く
曰相模人本間資氏と敵中傳観す資氏扇を揚呼て曰方今戰國
一矢愛すべし願くは返し賜んと賊中答射もる者あり箭岸に
達せず我軍齊く笑ふ射る者憤憤三百人を以て岸に上る義貞
撃て之を殲す賊の先鋒七百艘過て東し将に西宮より上らんとす
新田氏の軍三萬先往て之を拒んと岸に循て馳る騎する者
走るがごとく舟者追如し而て兵庫に人無し賊の後隊六千艘盡

兵庫ゟ上る楠正成戰歿す乃其陸軍と合し以て義貞ゟ躍す義貞
曰吾西宮の旗幟を覩ゟ支賊の〻兵庫より来る者其渠魁なり
吾之を擊んと乃還り生田林を背ゟして陣し迎へ戰ふ終ゟ利あ
らして走る義貞殿し數返し擊馬殪て徒となり丘ゟ上て救を
待敵之を環射す義貞二万を揮十六箭を截小山田高家望見還
救其馬を授け而て留り死す初高家軍ゟ從て民麥を刈法斬ゟ
當る義貞へを〻其營を視せしむるに鎧馬鮮ゟして粒粟無し義
貞曰吾罪なり士亡ふべし〻法乱をべし〻と乃田主ゟ償て粟を
高家ゟ賜ふ高家感愧す故ゟ之ゟ死を義貞因て脫るを得丹
波より殘兵六千を以て京師ゟ旣る上下色を失ふ天子復敵山り

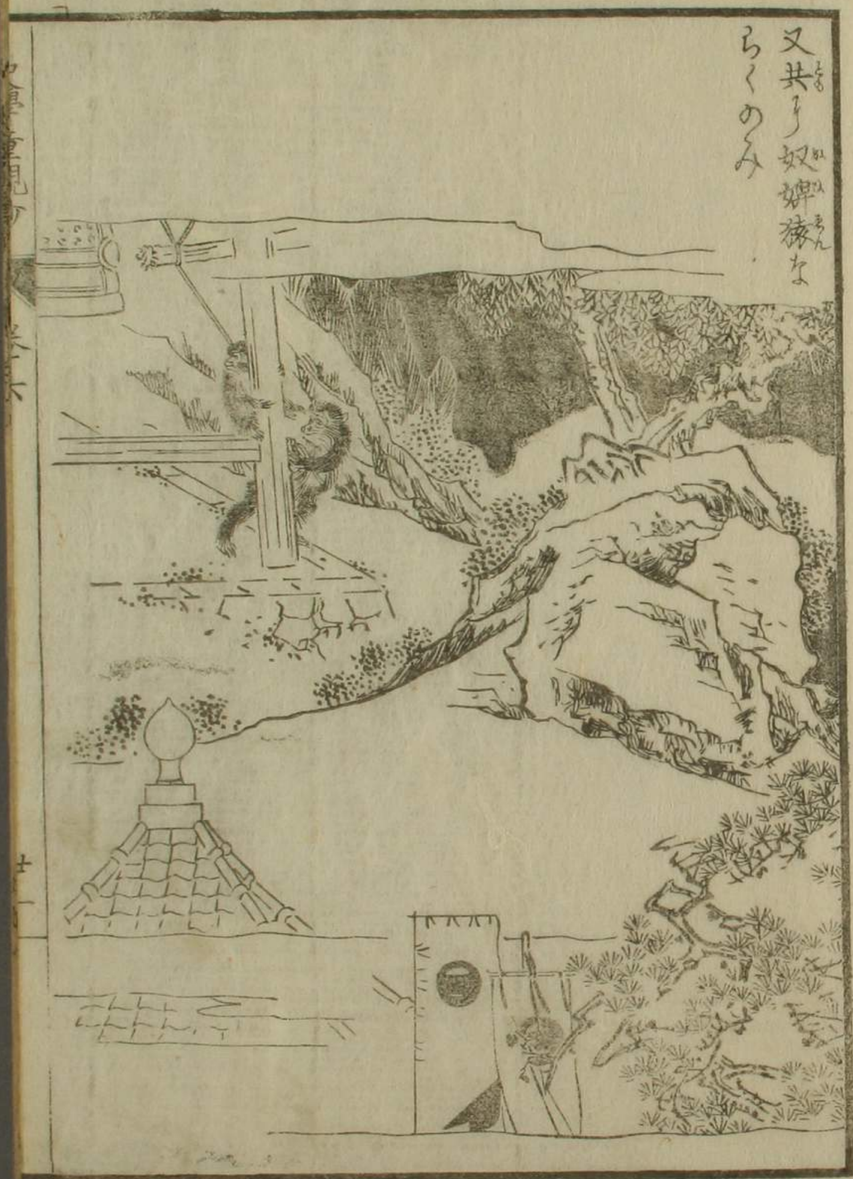
幸す六月尊氏京師ゟ入高師重等を〻〻来り攻む陣を三百
餘所ゟ分つ義貞義助諸將を以て東坂ゟ拒公卿僧徒ゟ西坂を
守らしむ賊乃先西坂を攻二卿千種宰相少將忠顯坊門少將忠直戰死し僧徒力支へ
を急を義貞ゟ告ぐ義貞紀清両黨と赴援け賊を谷より擠し數千
人を殺し大嶽ゟ陣す賊又東坂を攻義助擊て之を卻く賊更ゟ西
坂を攻んと欲を熊野の兵五百を以て前鋒とす皆黑甲を被雲母
坂より上る本間資氏相馬忠重義貞の側ゟ在り瞰て笑て曰今日の
事復諸君を煩さらと百餘歩を下り相命じて各一賊を射甲を貫
曹を穿つ賊敢て前すに二人我軍を顧て曰戰且合吾為ゟ的
を立ゟ將ゟ射を習けんと〻と我軍晝月扇を植二人相誡月を射

勿まして乃発す両箭月を挾む乃箙を解弦を鼓し自ら名りて曰く
盍ぞ吾箭を受て甲の堅脆を試さると賊懼戦たゝ卻く會山
徒光澄叛し夜賊兵を啓紀清両党覺て之を鑿す初我軍約す急
あらば鐘を撞て相報せんと一日群猿ありて鐘を撞諸營皆警す賊
兵以て官軍の下り擊と為大に騰ぐ官軍諸門を開き一時並下り火
を賊營に縱ち擊て大に之を走し高師重を生禽し義貞之を山
僧に附し斬て其首を梟す賊兵四潰し既して又聚る官軍猶
兵を寡く出て之を攻尊氏光嚴帝を挾て東寺に據て城を為し
兵を京師に出し官軍を要擊し官軍敗を還る七月藤原師基
北兵三千人を以て入援く諸將議て曰前日の戰ひ路を京中に取

敗る所以なり内野磧の二道より之に赴くに若ぐと已すて叛者
あり其議を泄す尊氏乃大兵を以て邀擊官軍復敗を還る天
子乃叡を叡山の僧徒に賜ひ以て之を奬激し南都を招し輙
之に應ぜ畿内の兵之を聞所在相聚各將帥を請糧道を四塞
す賊窮困し鎧馬を粥に至る遂に出て鹵掠す義貞出戰んを議
四國の兵を遣り炬を阿弥陀峯に列諸將帥に約し齊く進天子
親臨し軍を勞らひ御袍の所の紅裳を剪て之を賜ひ
以て笠識と義貞白て曰勝敗は天なり逆を睹ぐ今日の戰
箭を尊氏の營に送らぐれい復生還せぐと已して北白河火を失
す藤原隆資以て戰ひ合せし期に先て八幡より入り敗走に

我ハ鐘を撞て官軍を警そる群猿あり彼ハ唐帝播遷の駕ハ随ひ孫供奉あり又元の順帝貶謫の日ハ山菓を奉ぜしあり是等を皆勤王大義ハ明らかなる者ハ似たもの名けて和漢の義猿と謂んも可すし彼南山隠士ハ時を報ず魏元忠が殿下の火を守りしハ如きわ

又共ハ奴婢猿ならくのみ



南都の兵亦期を失して至らず義貞二萬騎を以て行て賊軍を
敗り終に東寺に抵り弓を執矢を注尊氏を呼び語て曰天下
擾乱せる久し皇紗の爭といへと雖抑公と義貞とに由り其一
身の爲に萬民を苦しめんやいかん寧各單騎を以鬪て雌雄を決
せん請一箭を送ると箭門樓を軼し尊氏の帳中に入る尊氏
出る時に諸公卿の軍及び四國の兵皆賊に破らるゝ賊兵悉く
義貞に萃る義貞反擊奮戰して之を破り五條に至る賊復
四合す義貞の額に流矢中り流血面に被ふる乃其騎に令して
皆其馬首を西にして決死せんと欲す紅笠識の者八百騎来て
之を救ひ義貞を擁して圍を潰して山門に奔る是に於て諸

將帥皆守を棄て走り奔る八月足利高経佐々木高氏等我糧
道を絶九月兵を遣て高氏を擊敗れ奔る我軍多く逃亡す尊
氏俄て降を乞帝に闕に奔んを請密に人をして款を致む帝信
じて之を聽しぬ尊氏又陰に諸將を招く諸將應る者多し
十月左衛門督藤原實世人をして来て義貞の營に告しめて曰
尊氏款を納車駕其營に赴く公之を知乎と義貞報を得て信
ぜず曰是使者の誤聽のみと美濃守堀口貞滿曰今日氏明行義
故無して中堂に赴く吾固より之を怪む請往詗ん之を行在
に至れば則乘輿方に駕す貞滿揖して進み其轅に攀泣て曰く臣
道路の説を聞未だ信否を知らず今乃信義貞何の罪有を審に

せざるを而て陛下其聖眷を回し以て反賊を庇しめや元弘の初ゆ
當て義貞辞を奉じ罪を伐元兇を旬日に殪し以て宸憂を除く
古の忠臣と雖恐くは過る能はじ尊氏反してより以来又舉族王
に勤し陛下の為に数百萬死を冒し宗黨義に死る者八千餘人
而て賊勢滋熾王師利を失ふ者豈盡く戰の罪なんや蓋天赤
聖德を眷せざるのみ今日西駕の輦竟に還さざるまんば則義貞
以下族屬見在者五十餘人死を御前に賜ひ然る後発しまつるを
帝憮然たり頃ありて義貞義助義顕と三千人を率入て階下に
列り色慍て礼恭し上義貞兄弟を前めて之を慰諭して曰尊氏反
するゆ當て卿其同宗たりて廷て義に叛し傾を支へ廃を扶

終始渝らず朕深く之を嘉す卿の宗族に伏て四海を鎮平せんと
欲天運未だ會せず兵疲勢蹙る是を以て権に和議を講し以
て時を待のみ不宜く謀及ぶし而も漏泄を慮り期に臨んで
相告んと欲せしに貞満未だ之を察せず然るも其言に由て亦
省る所あり朕聞越前の地方順に叛る者多しと又前に遣所の將
士あり卿宜彼に赴き北陸を経畧し以て恢復を圖るべし朕京師に
還らば恐くは卿賊名を得ん今特に太子を以て相附せん卿之を視
猶朕のごとくせよ軍國の事小大と無卿が處分に由るし朕已に
卿が為に恥を忍ぶ卿亦朕が為に努力せよと言畢て涙垂れ將
士皆泣能仰ぎ視る莫し遂に義貞を以て皇太子を奉じ越前

る赴しむ義貞即夜日吉祠を造り宝刀を納め禱て曰神吾忠義を
鑑吾行をして恙無く兵を発し賊を滅さを得せしめば人即
然るを得もんど子孫をして再起る者有しめ給へと明日東宮
及び皇子尊良を奉して北行し擧族之に従ふ獨大館氏明江
田行義及び宇都宮公綱本間資氏等乗輿に従ひ京師に入尊氏
帝及び従者を囚し資氏を殺し以て兵庫雲母坂の役に報う」
義貞七千騎を以て塩津に至り足利高経の大兵途を塞ぐを知り
轉じて木芽嶺より行大雪に會士卒凍飢し弓箭を燎相抱て
煖を取土居得能氏賊兵に遇て自殺す千葉氏其衆を挙叛して
賊に降る義貞行こと三日纔に敦賀に至る河島維頼氣比氏治迎へ

て金崎に入義顕義助を越後に遣杣山に至城主瓜生保厚之を待て
而て高経詐て詔旨新田氏を討の檄を傳ふ保之を信し門を閉て
自ら守る其弟僧義鑑来り謁て曰臣が兄愚魯軽して賊計を信
ず然るも苟是非を曉らは終に順に阪せんのを臣願くは一公子を擁
戴し時を候て乃起んと義助其他無きを察し遂に其子式部少
輔義治を之に託し兵を引て金嵜に還る兵道に亡て二百騎あ
て今荘淨慶兵を聚道を塞ぐに會淨慶の父ハ嘗て我軍に属す
る者なり義助乃由良光氏をして往て之に説しむ淨慶答て曰
臣去就父と異あり沮まざるを得ぐ願くは部下一名士を得て以
て口を籍ん光氏飯り報す義顕曰諸君我に従て此に至る情父子

る同じ寧我士ふ代るも士我る代莫き往て更る之を告聽ぞんば則ち
齊く戰死せんのこと光氏往て告淨慶決せざ光氏馬より下坐して
曰將帥身天下の輕重る係る猶身を以吾輩る代んと欲吾其命を
致さざるべけんやと刀を拔て將る自殺せんとす淨慶感歎し遠る
之を止く曰吾寧罪る當んのこと道を開て跪伏て義助義顯撫
勞して過其兵又亡在者僅る十六騎而く敵三萬騎を以金崎を圍
を聞圍を衝て城る入んと欲衆之を難んぜ栗生顯友策を出し夜
衆をして衣帶を解之を樹る挂旗幟の狀を為しめ以て疑兵を張
武田與一右手を傷く木刀を腕る約す顯友副刀を亡ふ木を斫て
為り曉る乘じ敵ふ薄り呼て曰杣山の援兵至ると敵駭き顧義貞

因て出擊之を走し義助義顯を納是る於て相與る東宮皇子を
船る奉じ置酒して樂を奏し以て之を慰籍す尊氏又高師泰等
を遣兵六萬を將て海陸來り攻城山を負海る臨城兵拒戰日ふ千
餘人を斃す十一月城兵海上を望見をば人の泛ぐ者あり城を望で
來至るば則互忠景なり詔書を髻る結び之を進む蓋天皇吉野
る逃れ行宮を建義貞る詔し京師を攻しむる也義貞等大る喜ぶ
時る瓜生保賊軍る屬し城下る在而て其諸弟杣山る起り以て義
貞ふ應ず保將る拔還らんとす同志の者を得んを思ふ于都宮秦
藤天野政貞保と營を鄰る一日客あり二人る問て曰重畫中黑孰ろ
美秦藤曰中黑なるかる三鱗廃して重畫與る重畫る代る者中黑

非乎と三鱗は北條氏の徽号なり政貞曰然りと保聞て竊に喜び
寔二人と欵〻因て其志を告二人之に同む時に高師泰四に関を設
符を以て出入す保詐請百五十人を以て其邑に皈り救を取と吏符
を給す其言の如くに保符を削改て三百人と書し泰藤政貞と俱
に関を出て杣山に入義鑑及び三弟源琳重照皆大に喜び義治を
推て将と〻旗を擧て兵を招く兵聚る千餘北道を扼守す師泰
之を聞て六千騎を〻て来り撃〻む保悉く聚落を焚故に湯尾
一驛を遺し以て敵を誘敵至て驛中に宿す保泰藤と軽兵を遣
夜襲て之を敗足利高経が兵を引く國府に皈ると聞安撃し
て之を破る旁近風を望み爭ふて義治に附す義治不豫の色有

義鑑曰郎君喜ぶべ〻して憂ふるは何ぞや曰金嵜城守の苦を思ふ
のみと義鑑泣下泰藤政貞墻を隔て之を聞て曰此子心腸ある
此のごとし吾曹曷ぞ力を出さざるべけんと明年正月里見時成を推て
将と〻五千騎を以金嵜を救ふ師泰兵二萬を遣逆へ戦ふ諸将敗
走す時成賊に圍る保義鑑身を挺で赴き援く其三弟従んと欲
義鑑叱て曰吾兄弟皆死せは誰か式部君を翼る者ぞと三弟乃
止る時成保義鑑皆死し餘衆走て杣山に皈る保老母あり酒を酌
み義治に獻〻て曰兒輩力ぶ乃里見公と亡然とも兒輩を〻て
盡く還らしめ則妾が心云何今二兒命を致す妾が心を慰るに足
と将士為に奮激す然も力再擧難し金嵜城中に入日杣山

嗚呼
瓜生氏の母其二子の戰死を
聞て悲しみ自酒を獻じて
將士を励ます〳〵王孫賈の
母の其子を讓て齊國を陵
王陵の母の劍を伏て其子を
漢王に從はしむ如き千載
の下義氣の凛々たる和漢
同日の談にして皆是女中の
偉丈夫と謂ふへし

君が為とうるはしきとりわ
かなくさきけ〳〵国の瓜まと

守城

の援を望まるべきのみにて糧竭義貞義助愛する所の馬を殺し
以て士卒を食ふ将士皆出て杣山を赴き以て夾攻を計んと勧し
義貞義助之を従ふ三月河嶋維頼を以郷導として夜を乗じ
城を出潛に杣山城に入城兵大に喜ひ日ゝ金崎を援んと議す而て
賊兵暖に乗じ来聚る十萬騎杣山の兵僅に五百人又甲馬備ら
ず逗撓二旬金崎の兵馬を食し馬盡食ふべき者無し賊之を
候知り四面齊しく登る城兵力竭て戰ふ能はず外城既に破らる
由良具滋長濵顕寛入て義顕を見て曰事已に此に至東宮を
脫して留り死臣等請拒ぎ戰ん君徐に計を為ぬと五十人を
率ゐ出て死尸を割相共に之を食ひ力尽て前門を拒ぐ義顕皇

子尊良に謂て曰臣ハ将種死せざるべからず殿下ハ臣と異なり
遠く自ら殘ひぬべきと皇子笑て曰吾卿が死すると視て獨生
なしやと義顕に自殺の法ハ如何と問義顕曰臣が為す所を視
よと即刀を拔て自ら左脇に樹畫して其右に至刀を皇子に
奉て伏皇子刀を取ふ血滑にして握べからず衣袖を以て之を
握り自刎して死ぬ藤原行房里見時義武田與一氣比氏
治等皆之に殉死す氣比齊時膂力あり善泅舟に太子を載し
ふ楫檣無し乃組を舟に施し之を執て游ぐこと千餘歩無木
浦に至り土人に託して之を杣山に奉せしめ金崎に帰て死す
具滋顕寛事畢まると謂門を開き陣を冒して進て師泰ハ

薄る賊其疲羸と認覩して之を殺す凡城兵八百降る者十二人
のみと餘の皆死す栗生頭友船田経政等四人岩穴に匿れて免る太子
蕪木浦に匿る浦人叛いて賊に告賊太子を取義貞兄弟の在所
を問太子紿て曰昨自殺し其兵之を火すと賊乃太子を尊氏
に押送し義顕の首を傳へて又義貞を問す義貞私山に有
て一戰して恥を雪き以て行宮の聲援を爲んと欲間に義故を
招聚夏大館氏明京師より伊豫に逃江田行義丹波に逃金
谷経氏播磨に逃げ並に兵を起す義貞の次子徳壽上野に在
源顕家の西上すると聞兵を聚て之を應し先発して鎌倉
を攻んと欲顕家の至る及兵を合し攻て之を拔是に於て義

貞に敗れる者頗る多し尊氏義貞の未だ死せざるを聞冬足利
高経を遣北陸の兵を擧て来り撃越前の府に據兵を出して
交戰ふ義貞畑時能を遣加賀の兵と糾し攻て大聖寺の城を
拔義助及細谷秀國を遣り越前に入て三岩を築き高経と相
持す明年二月雪釋義助益城を築き敵に逼んと欲し百餘騎
を率ゐ地を鯖江に相す賊將細川孝基五百騎を以て奄至
に遇義助撃て之を走らし因て火を擧て援を招く義貞来
援て高経又数千騎を以て来り水を夾て陣す我兵流を乱し
大戰して撃て高経を破る高経走て足羽を保賊風を望て解
走者三十餘城義貞乃國府に據事京師に聞尊氏真義怒て

曰太子我を給き此に至ると遂に之を鴆殺す是時に當り官軍頗振ふ德壽顯家に從て美濃に至る堀口貞滿亦之に附し皆義貞と軍を合し以て京師に入んを願ふ而て顯家獨其功を專にせんと欲遂に兵を引て回て南都に出時に叡山の僧徒又多義貞の來を望む而義貞必す足羽を拔て後西せんを欲是時顯家和泉に敗死弟顯信德壽等と男山に據帝手書し義貞に諭し男山を援しむ時大井田氏經等越後の兵を發し擊て普門富樫の二氏を破る七月進て越前に至る義貞其兵と并せ將に高經を攻んとす而て詔書適至義貞感奮して曰源平氏有てより未だ天子親書の詔を得たる者を聞ざる也と因て直に赴援けんと欲兒嶌高德の策を用ひ自ら兵三千を以て高經を備へ二萬を以て義助に附し敦賀に至り男山陷と聞引還り兵を合して專ら高經を攻高經平泉寺の僧兵を誘し藤島以下七寨を修して之を守る是月二日義貞諸軍を以て足羽を攻燈明寺前に至り兵を分て七隊とし以て七寨に當つ藤島の兵擾動す我兵因て疾攻て拔能つ義貞望見遽に五十餘騎を以て之に赴く賊兵三百に田中に遇矢下雨の如し我兵稍無し身を以義貞を蔽中野宗昌義貞獨身遁逃を勸む義貞曰士を失て獨免る吾志に非る也と馬に鞭して且進馬箭を被て殪る義貞起んと欲白羽箭あり其眉間に中る乃刀を拔自ら刎

て死年三十八賊未だ其何人たるを知らざる宗昌等屍を環て自殺し又戸を撿して錦囊書を得書辞に曰討賊の役朕一の卿を煩と蓋帝の手書なり乃其義貞なるを知時に日暮我軍赴援る者無し已ゆて数騎河合に還ると見以為義貞各自退還と義助還て河合に至り義貞を求るに在らざる久うして實を知将士惶惑し叛者あり夜将に城に火せんとする者三天明其兵を撿もれば則二千のみ義助乃走て國府に皈河嶌維頼として三峯を保ち畑時能に湊城を成生照ふ杜山を保し照皈に藤原氏に浅津橋に遇ふ藤原氏へ中納言行房の妹而て義貞の夫人なり初勾當の内侍 勾當内侍 掌侍の内第一の内侍を勾當又長橋の局ともいふ 延元の初義貞に

賜ひ妻と為 忱懼甚だ驚し義貞の詔を受て北行するを近江に置く居ること二歳杜山に迎へ致す既に至り義貞の足羽に在を聞轉じて之を赴く途に照ふ遇照馬より下輿前に跪て曰夫人安ること往公已に戰歿せり夫人大に慟殆ど絶杜山に皈り喪を義貞の舊居に執んと欲す敵来り逼るを以遂に京師に皈る是時義貞の首傳て京師に至る足利氏の君臣相慶終に之を梟す藤原氏之を聞即夜髪を削り遂に西山に隱て身を終る 藤原氏子無し義顕義興義宗皆東國に産す義顕義貞に先て難に殉す義興妾出故に義宗義顕に代て嗣と為六歳左兵衛佐と為武蔵守を兼義興の即德壽男山

の陷る走て吉野に皈る帝其貌を壯として曰汝乃父の家を興す者と因て名を義興と賜ひ右兵衛佐を授て義貞歿して二旬義興北條時行に皇子宗良に從ひ東國に赴き颶に遇て相失ひ漂て武藏に至る是に於て義宗と曾東國に惹る義助義治北國にあり七月義助稍敗軍を收め畑時能由良光氏一井氏政等と各諸城を屠りて河合に會し兵六千を以て足羽を攻ひ時能先行て城に薄り戰を挑む足利高経城に火して走る是歳帝崩ドぬひ後村上天皇位に即ぬふ十二月義助に詔て義貞に代り師を紗義助先帝の崩に臨て特に新田氏を眷々ぬふ聞方に報效せんと思ふ而て尊氏七國の兵と

發て来り攻諸城悉く陷る義助美濃に走る獨畑時能殘兵二十七人を以て鷹巣城に據城長く險固中て賊拔こと能ハ足利高経高師治兵を合て之を圍み三十七營を結び互に進を送る攻時能幼より角觝を喜ぶ村武人に絶す姪僧快舜善戰ひ僕惡八郎に缺居はして力あり又一狗を畜ふ犬獅子と名く三人夜る出て賊を襲ひ一營に向ふ毎に狗をして先往しむ賊備あること紀ハ吠不るときは尾を搖し還り報す三人乃營を斫入て大に呼て奮擊す賊輙甲を委て走る各潛に時能に賂ふて我營を襲ふ勿れと云ふ時能驍名敵中に震ふ呼て畑將軍と云ふ一井氏政の来て城に入ふ會共に守る時能乃氏政と城に留

め自ら十六人を以て夜る伊地山より出高経以為平泉の僧来て城兵を援なりと三千騎を将ゐ邀へ撃時能鮮甲鐵馬躍り出て曰畑将軍此なりと高経の軍動く時能馳て之に乗す高経潰え走る而して快舜七創を被り即日死す時能甲隙皆創き飛鏃肩より没す病三日ゆゑを死す是より北國復官軍無し賊乃義助を根尾城に攻城陥り義助族従数十人を以て微服し尾張氏に投す留ること十餘日道を伊賀伊勢に取て行宮に至る帝延見あひ泣て之を労し詔して一級を加へ且従者を賞す藤原實世竊に言て曰是何ぞ維盛の敗を飯りしに爵を加へしに異なるんやと藤原隆資之を折して曰義助の敗其罪に非るなり近日北國の将士大将に由すして裁を南山に取り南山の臣僚微労に服するを以て吊を北國に得将推以て軽く士心以て驕る義助其敗を受豈其罪ならんや主上之を察しぬひ乃此命あるは猶秦穆の孟明を労せしごとのみ（秦の将孟明視西乞術白乙丙鄭國の軍に負て敗りける穆公素服郊迎て我百里奚蹇叔の言を用ずして辱を招しに三子何の罪有と謝て三人の官爵を復せしとあり）子何ぞ喻を失はるやと實世答ふる能はず帝遂に義助を刑部卿に拜す興國元年三月伊豫の官軍將帥を得んを請ふ朝議義助を擬す而て海陸皆敵備前の人飽浦信胤官軍に應じ道乃開き義助兵五百を以て発し四月伊豫の國府に至り大館氏明に遇ふ氏明初京師を逃れ行宮に詣り伊豫の守護と為るを得土居得能氏と諸城を保守す

義助海を航して
豫州に赴く

公の適て豫州の將帥と
為るや天を〻て之が年を
假もの〻は焉を知らん
中流に舟楫を擊ち誓て
賊を滅さらんことを豈
獨祖逖をして義を千載
に擅にするを得せしむ
のみならんや嗟嗟

義助を得るに及て軍益振ふ議者皆謂ふ西南復すべきなりと
五月義助病作り七日ゆゑて卒す將士喪を祕す而て賊已に之
を知り来て河江城を攻金谷経氏伊豫の兵と紗之を救ひ大に
海上に戰ふ風起るに會我船漂去し賊船岸に達す我兵風を冒し
之に返んと欲す経氏曰我軍數奇此に至る返るも必す利あらし
唯當に山陽に至り一城を取て之に據るべしと乃備後に上り鞆
城を攻拔く之に據る山陽の賊兵来り戰ひ示ざ決せざるに賊
將細川頼春氏明を世田城に圍を聞経氏數百騎を將ゐ赴き
救ひ賊兵數千と戰ひ敗を殘兵を率ゐ備後に皈る頼春乃萬
騎を以て世田を攻三旬城内食竭氏明以下悉く自殺す篠塚

伊賀城中に在門を開き鐵挺を提て出呼て曰吾い新田公の親兵
篠塚なり盍ぞ我を討て以て賞を得ざるや賊皆披き靡く乃
徐行して去賊敢て追躡せず今治浦に至り賊の空船を見篠
塚游ぐ之に達し跳て船に入自ら名いふて曰吾を隱岐に送
と手ら錨を拔捥を樹船屋に登て鼾睡す舟人畏怖し送て隱
岐に至り以て終る篠塚に女あり皇太后に仕ふ伊賀の局といふ
後楠正儀に嫁す勇力父に類すと云ふ義貞義助既に死し足
利氏復忌憚無し兒島高德備前にあり新田義治を上野
より招き兵を起さんを謀る克す乃間て京師に入尊氏を襲い
んと欲し又克ず義治走て東國に匿る從兄義興義宗と皆

潛ま父仇を復せんと圖り釁を窺ふて未ざ発せざる也正平六年尊氏直義と隙あり長子義詮をして京師を守らしめ自ら東直義を擊て之を殺し入て鎌倉ま居り次子基氏を立て東國を管領せしむ義詮偽て降を請ふ帝之を許しぬふ兒島高徳由良信阿と行宮より至り旨を新田氏ま諭く曰天子義詮の降を納京師ま還る其實ハ虚ま乗し誅を行ふ也尊氏彼まあり公等之を圖ま機失ふなからぶ因て義宗ま左近衛の少将を進む義宗乃東國ま徇義貞義助の遺臣奮起て来り從ふ数萬騎を得たり直義の故黨石堂義房三浦高通等又内應を為戰酣ま起く尊氏を刺んを約す尊氏覺て之を逐ふ而て義宗等未ざ知らぶる也閏月兵を武藏野ま勒す義興左ま居り義治右ま居り義宗自ら中軍ま將として其後ふあり尊氏の兵十餘萬義興先合て義治之ふ次殺傷相當る歟將饗場某六千騎を率ゐ更ま進義宗兒玉黨を麾き擊て饗場を走らぶ饗場走て尊氏の陣ま入尊氏の陣大ま乱る義宗眞ま前其牙旗を指大ま呼て曰吾今日天下の爲ま賊を討一家の為ま仇を復すと奮擊て之を破り北ると追ふ馳る者三十餘里石濱ま至る尊氏自殺せんと欲す其兵返戰て之ま死す尊氏間を得濟て前岸ま達て兵三萬を收め水を壓て陣す

而て義宗の騎能属する者五百人時已に昏黒来り助る者無し義宗歯を切て止乃還り義興義治を求む義興義治白旗の兵三萬北走を見以て尊氏なりと為兵を合して之を追ふ降る者路に属す二人馬を駐め之を揖する者数其兵顧ずして前を留り従ふ者僅に三百伏兵数千之を圍むに遇ふ二人苦戦して出づ甲冑皆破刀刃鋸のごとく身各数創を被ふり百餘騎を亡ふ乃議して曰我既に武蔵守と相失ひ此寡羸を以て将に安に皈らんとす基氏に遇死を決するに若ず と衆之を然りとし進ぐ関戸に至る石堂三浦氏五千騎を以て西行するに會其兵を并せ鎌倉を襲ふ基氏甲を巻

出拒ぐ義興海濱に鬬ひ三騎を斬り馳て賊陣を貫く左轡断て地に委す乃刀を脇に挾を俯して之を結ぶ賊群り至り其項及ひ背を撃義興勒して結ひ畢て賊に應ず賊驚き走る遂に義治と合して撃て基氏を走らし仍鎌倉に據る義宗時確氷嶺に據る越後信濃の兵三萬皇子宗良を奉し来るに會上杉憲顕等又尊氏兵八萬を救ひ鎌倉を復せんと欲す義宗の軍復揮ふと聞乃先確氷を攻む確氷の地山を負川を帯び據守に便なり而て義宗年少氣鋭数出て平地に戰ふ敵兵を更交進午より酉に至る義宗終に敗走し嶺に上て陣す既に夜に

足利氏の軍炬を擧山澤に布滿す我軍を顧視まれば
炬燭火のごとし義宗驚て曰晝日失亡さる所未だ此の如き
ふ至らに逃るゝ者有る非ざる歟得んや前に勁敵あり後に
郷土あり衆我退走を疑ふ也と乃自ら鎧を釋鞍を卸し
以て走らざるを示す衆稍定る夜半上杉氏炬火數
千復賊軍に屬すを望み見則遽に信濃に走る是に於
て走る者相踵ぐ義宗獨留るを得す曉る比退て越後に
入州の兵盡く尊氏に附還て鎌倉に向ふ義興義治迎へ
戰て死を決せんと欲す將士諫止し乃信濃に走る義宗
既に越後に飯り帝の猶行宮に在すを聞赴援んと欲兵

七千を收め越中に入桃井吉良石堂小山宇都宮の諸族皆
之に應ず皇子宗良を奉して西上す途に行宮已に陷る
を聞乃解飯る是後に赤松則祐亦行宮に就降り將軍興
良を奉ぜんと請ふ興良の故の護良の子也材武父に類す則
祐護良の舊恩を思ひ擁して播磨に據以て聲援を為ん
と欲帝之を許しぬふ則祐敗を叛去するに及ひ興良を
京師に拘ふ但馬の人本莊某之を奪ひ則祐と戰て敗死す
興良走て吉野に飯る後十餘年赤松氏範官軍に屬し
復興良を奉して主と為し已まして叛し義詮に應す帝
兵を遣り擊て氏範を走らに興良南都に奔り終る所を

知らば義宗義興義治と俱に越後に匿れ居ること数年武
蔵上野の将士連署して来り一人を請ひ奉戴して義を挙ん
といふ義宗義治疑ひ敢て往ず義興奮て往足利基氏兵
を発して来り捕ふ國人相俱に之を匿す或い兵を以て圍む義
興輙ち圍を潰て逃る蹤迹をくらぐら基氏之を患ふ我故将
竹澤良衡族江戸尭寛と叛して基氏に降る基氏の宰畠
山國清二人に囑して義興を圖る乃罪を獲たる為て亡来て
義興を索ること之に仕へ啗すに美姫を以てし漸狎近を得
因て之を誑て曰鎌倉襲ふべしと義興衆を率て先往し
め親信と之に継路矢口の渡に由る尭寛舟人をして舟腹を
鑿て之に納せしめ載て中流に至て納を拔て去伏兵河
を夾て起る舟将に没せんとす井伊直秀手義興を掠く
義興眼を瞋して曰悔竪子の計に陷ると腹を割て死す直
秀世良田由良大島等と皆自刃す土肥市川等刀を卸て
泅ぎ尭寛と鬬ひ十餘人を殺傷して死す時正平十三年
十月なり基氏二人を重賞す尭寛邑に赴くに復矢口に
由時天俄に雷雨す顧て義興の已を追ふと覩馬より墮疾
作て死す鎌倉人又義興の来り襲ふと夢みる矢口の民祠
を立て義興を祀る義興既に死して義宗義治仍越後にあり
二十年足利義詮死子義満猶幼明年七月義宗義治兵

を越後上野に起し足利氏の将上杉能憲と戰て克ず義宗之に死し義治出羽に走る建德元年正月義治兵を收め武藏上野に出上杉朝房と戰て復克ず走て信濃に匿を終ふ所を知らず義宗の子貞方相模守と為義治の子義隆刑部少輔と為後亀山天皇元中二年二人並に信濃浪合に匿を齊に宗族を集む足利氏滿鎌倉に管領し兵を遣之を鏖す貞方義隆脫走し陸奥に入九年天皇足利義滿の勅和を納北京師に入ゐふ義滿天下に購て新田氏の族を索む是より先小山義政小山城に據新田氏の為ゆし氏滿攻破られて死す義政の子稱狗復兵を起して男躰城に據年餘城陷り走て陸奥に入り田村清包に依是に於て相共に義を舉貞方義隆を推て將と〳〵白河に軍す氏滿十一州の兵を將ゐ來り擊吾衆潰て貞方義隆復逃去す是歲丙子なり歲癸未義隆箱根山中に匿る竹下の人安藤某之を鎌倉に告來り捕ふ義隆鬪死す歲庚寅なり貞方鎌倉に在て陰に義故を糾合す事覺て千葉兼胤に捕へられ七里濱に斬る新田宗紗是に於て絶而て其支族參河に匿る者歲再び庚寅に周て後大に興る事は末編に詳なり

史學童觀抄巻六終

日本橋通一町目　須原屋茂兵衛
同　二町目　山城屋佐兵衛
同　所　小林新兵衛
芝神明前　岡田屋嘉七
同　所　和泉屋市兵衛
通油町　藤岡屋慶次郎
馬喰町貳丁目　森屋治兵衛
同　所　山口屋藤兵衛
浅草芽町壱丁目　須原屋伊八
横山町壱丁目　出雲寺萬次郎
同　三丁目　和泉屋金右衛門
兩國吉川町　大黒屋平吉